

本格的に寒くなりました。大陸からの寒気がやってきたということですが昨年比べ、非常に寒いですね。インフルエンザの患者さんも少しずつ増えてきています。ご注意ください。いつも通り、うがい、手洗いですよ！お忘れなく。

三回に渡り、東京、神戸など厚生労働省や医師会主催の研修医の指導者講習会に行つて参りました。朝から晩まで缶詰で厳しい講習会でした。数年前に起こった某大病院の研修医の過労死から「研修医も労働者である」という定義がなされました。世の中では当たり前でも医療界では当たり前でなかったのです。労働者であるということとは労働基準法で守られるということで、具体的には週四十時間の労働が基本だという事です。皆さん医者がどの位働いているか考えたことも無いでしょうが、九時から五時までで終わることは稀で、その上、当院のように夜間の救急まで診ていると週に一〜二回の当直があります。他の職種であれば翌朝、お疲れ様で帰れますが、医師の場合、前の日に入院した患者さんを診たり、処置をしているとあつという間に夕方になります。それから急患が入るとまた帰れません。いつもでは有りませんが、結構こういうのが通常化しています。

さて研修医の話に戻しますが、医師の場合、その労働者としての側面と新人研修者の側面があります。上級医が夜も帰らずに頑張っているのに新人の研修医が五時になりましたのでお先に、では教育になりません。ここで先ほどの労基法の話になるわけですが、どこまでが労働でどこからが教育かの線引きが難しいのです。教育については、最近の流行で「全人的教育」という言葉がよく出てきます。うちの子供が小学校の時の教育理念にも同じ言葉が使われており、元々は子供の教育に使う言葉です。研修医が子供というわけではないのですが、研修医教育には成人教育と新人医師としての子供の教育が必要ということ。わかりやすく言うと医師としてのしつけをなさないとということです。マナー教育だけでなく医師として必要な人格育成が必要ということです。

医師には人間を診ると言う重い責任があり、大いなる人格形成が求められます。患者さんが治療により良くなれば、大きな達成感があり、その経験の積み重ねが医師としての資質を高めます。時には厳しい決断を迫られる局面に当たり、心臓が飛び出しそうなほどの緊張を強いられ、それを乗り切ること強い意志と決断力が身に付きます。医師は自分の勉強だけでなく、後輩の教育も大事な仕事です。自分の部下を育てる力があつて自分の教育を完成することができます。きちんとした形での「教育をすること」が必要で、昔の「見て盗め」では駄目な時代になりました。

以前に増して、世間の医療界に対する目が厳しくなり、医師の負荷は増える一方ですが、それに打ち勝つだけの技量と資質が問われる時代となりました。それでも笑顔で接する度量ができれば研修医教育は成功したと言えるでしょう。

